

平安京右京三条一坊二町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊二町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびビル新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

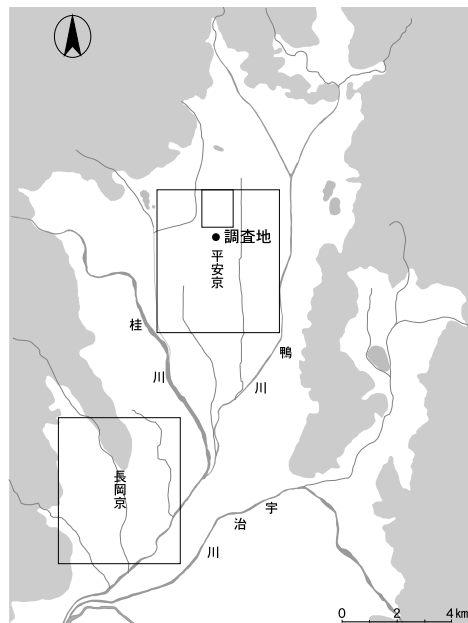
平成16年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条一坊二町跡
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京梅尾町
- 3 委 託 者 西日本旅客鉄道株式会社 執行役員京都支社長 福山隆夫
- 4 調査期間 2004年7月12日～2004年9月3日
- 5 調査面積 466.5m²
- 6 調査担当者 能芝 勉・近藤奈央
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 図版順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 17 本書作成者 能芝 勉・近藤奈央
- 18 編集・調整 児玉光世・大立目 一
- 19 人骨の鑑定 人骨は京都大学の片山一道教授に鑑定していただいた。
- 20 自然遺物の分析 環境考古研究会に依頼した。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺の調査	2
3. 遺 構	3
(1) 層 序	3
(2) 江戸時代後期から明治時代の遺構	6
(3) 江戸時代中期の遺構	6
(4) 平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構	7
(5) 平安時代前期の遺構	7
4. 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 江戸時代後期から明治時代の遺物	9
(3) 江戸時代中期の遺物	13
(4) 平安時代末から鎌倉時代初頭の遺物	15
(5) 平安時代前期の遺物	17
(6) その他の出土遺物	18
5. ま と め	20
6. 付章 溝64の土壌分析について	21

図 版 目 次

図版1 遺構	1 調査区全景 第1面(西から)
	2 調査区全景 第2面(北から)
図版2 遺構	1 溝64上面遺物出土状況(北から)
	2 溝64断面(南から)
図版3 遺物	出土木製品・亀甲製品・銅製品
図版4 遺物	出土軒瓦
図版5 遺物	溝64出土土師器
図版6 遺物	溝70・その他の出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図および周辺調査（1：2,500）	1
図2	調査前全景（西から）	3
図3	調査風景（北東から）	3
図4	遺構平面図（1：200）	4
図5	調査区北壁断面図（1：100）	5
図6	溝1・溝6・湿地状遺構11断面図（1：50）	6
図7	溝64断面図（1：40）	6
図8	溝64上面平面図（1：40）	7
図9	溝70断面図（1：40）	7
図10	溝1出土遺物実測図（1：4、11・12は1：2）	9
図11	土壌7出土遺物実測図1（1：4）	10
図12	土壌7出土遺物実測図2（1：4）	11
図13	湿地状遺構11出土遺物実測図（1：4、86・89・90は1：5）	14
図14	土壌17出土遺物実測図（1：4）	15
図15	出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	16
図16	溝64出土遺物実測図（1：4）	17
図17	溝64頭蓋骨出土状況（東から）	17
図18	溝70出土遺物実測図（1：4）	18
図19	ヨーロッパ陶器皿	18
図20	溝64出土銭貨拓影（1：1）・石器実測図（1：3）	18
図21	弥生土器実測図（1：4）	19
図22	溝64における種実ダイアグラム	21
図23	溝64における花粉ダイアグラム	22
図24	溝64における主要珪藻ダイアグラム	22
図25	溝64の花粉・胞子・寄生虫卵、珪藻、種実	23

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	2
表2	遺構概要表	3
表3	遺物概要表	8

平安京右京三条一坊二町跡

1. 調査経過

この調査は、(仮称) JR二条駅東NKビル新築工事に伴い実施した発掘調査である。調査対象地は京都市中京区西ノ京榎尾町内に所在し、平安京条坊では敷地のほぼ中央から東側が平安京の朱雀大路に該当し、西側は右京三条一坊二町の宅地内の東端部にあたる。右京三条一坊二町は平安京諸官衙のうち穀倉院が所在したところである。また、平安京以前の遺跡として弥生時代から古墳時代の遺物が出土する壬生遺跡の範囲内にあたる。

今回の調査に先立って、試掘調査を2004年7月1・2日に実施している。試掘調査は、朱雀大路と築地・側溝などその関連施設の確認と宅地内の遺構残存状態の基礎的なデータを得るため、調査対象地のほぼ中央に南北約2m、東西約35mの範囲でトレンチを設定した。その結果、対象地の西半は旧国鉄の関連施設で地表下約2.5mまで攪乱されていた。また、対象地の東端から約10m付近までは江戸時代の湿地状遺構が広がっていることが確認された。この試掘調査の成果を踏

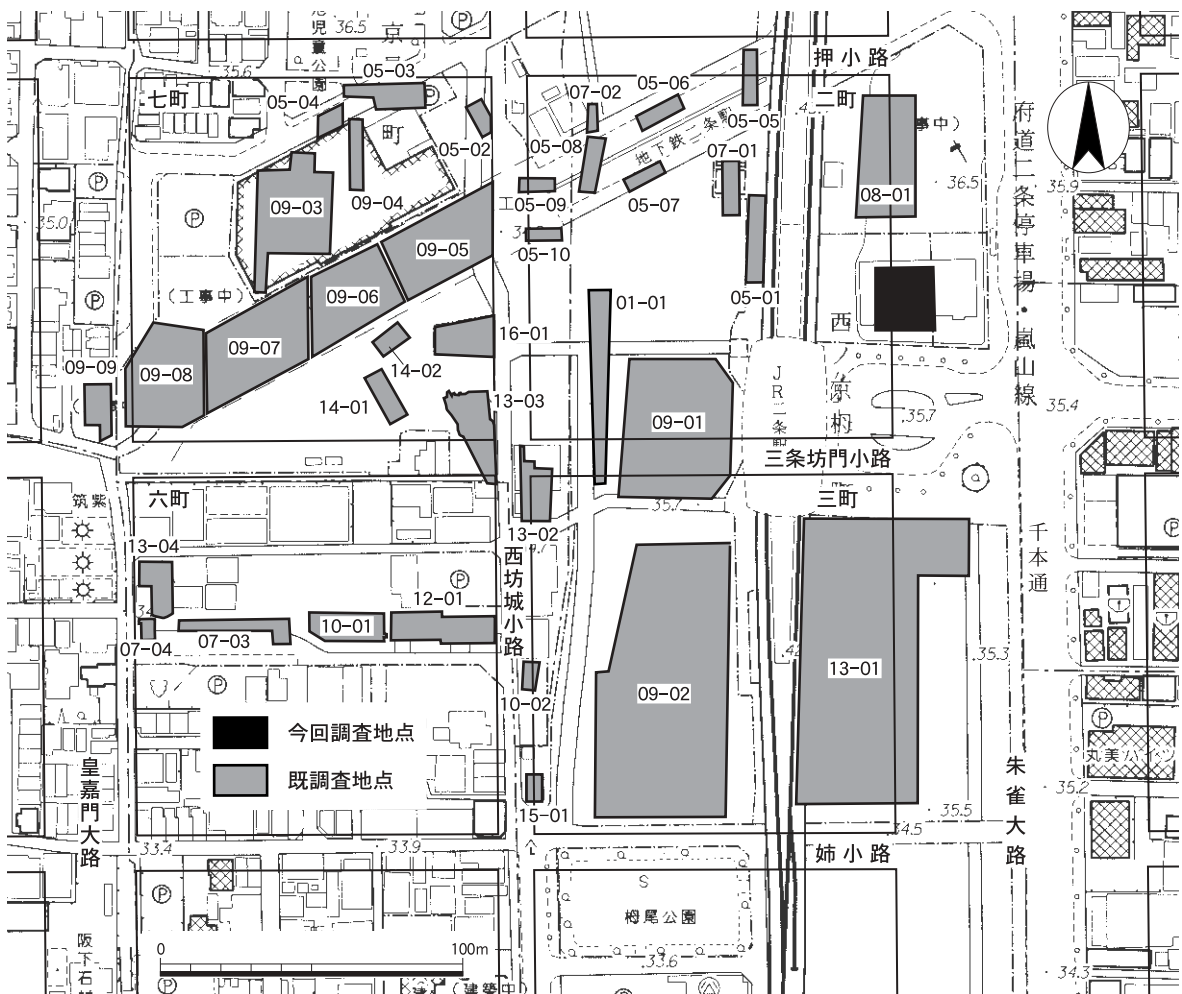


図1 調査位置図および周辺調査 (1 : 2,500)

まえ、平安時代の遺構残存状態が比較的良かった対象地のほぼ中央に、朱雀大路西側溝と穀倉院の東辺部を含む東西約20m、南北約20mの調査区を設定した。調査は2004年7月12日から付帯工事および重機掘削を開始、8月31日に調査を終了し、9月3日に埋め戻して現地作業を終了した。

2. 周辺の調査

今回の調査地周辺の発掘調査は、JR二条駅地区土地区画整備事業、御池通西進延長工事、地下鉄東西線西進工事などに伴い多数行われている（表1）。朱雀大路西側溝、姉小路北側溝、三条坊門小路南側溝など平安京の条坊に関連する遺構をはじめ、今回調査地の二町を含む一・七・八の4町を占めるとされる穀倉院関連施設では、七町で大型建物2棟、井戸、池などが検出されている。隣接する三町の右京職推定地では、主要施設とみられる大型建物や、右京職の推定を裏付ける「右籍所」、「計帳所」などの墨書土器が出土している。平安京以前の壬生遺跡に関連するものとしては、弥生土器や石包丁などの石器類、古墳時代の土師器・須恵器などが多数出土している。

表1 周辺調査一覧表

年度	No.	調査法	文 献（発行：財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
1989	01-01	発掘	「平安京右京三条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1994年
1993	05-01	発掘	「平安京右京三条一坊1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1996年
"	05-02~04	発掘	「平安京右京三条一坊3」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1996年
"	05-05~10	試掘	「平安京右京三条一坊6」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1996年
1995	07-01~02	試掘	「平安京右京三条一坊1」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1997年
"	07-03~04	試掘	「平安京右京三条一坊2」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1997年
1996	08-01	発掘	関西文化財調査会 未報告
1997	09-01	発掘	「平安京右京三条一坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1999年
"	09-02	発掘	「平安京右京三条一坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1999年
"	09-03~04	発掘	「平安京右京三条一坊3」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1999年
"	09-05~09	発掘	「平安京右京三条一坊4」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1999年
1998	10-01~02	発掘	「平安京右京三条一坊1」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 2000年
2000	12-01	発掘	「平安京右京三条一坊三・六・七町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 2003年
2001	13-01	発掘	「平安京右京三条一坊三町（右京職）跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3 2002年
"	13-02~04	発掘	「平安京右京三条一坊三・六・七町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 2003年
2002	14-01~02	発掘	「平安京右京三条一坊七町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-1 2003年
2003	15-01	発掘	「平安京右京三条一坊三町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-16 2004年
2004	16-01	発掘	「平安京右京三条一坊七町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-3 2004年



図2 調査前全景（西から）



図3 調査風景（北東から）

3. 遺 構

(1) 層 序

基本層序は、表土下約1.3mまで旧国鉄二条駅関連の盛土で、以下に約40cm程度の2層からなる江戸時代中期以降の耕作土がある。以下は基本的に灰白色粘土、もしくはオリーブ灰色微砂の地山となる。ただ、部分的に低い所には薄い平安時代末から鎌倉時代初頭の整地層が残る。また、調査区の南西隅の一部には、平安時代以前と推定できる薄い黒褐色～灰白色の粘土層が残存していたが、遺物を包含しておらず時代を特定できなかった。各時代の遺構は、耕作土直下または鎌倉時代初頭の整地層直下で地山を切り込んで検出した。検出した遺構は平安時代前期の溝（溝70）、平安時代末期から鎌倉時代初頭と推定される溝（溝64）、整地層（湿地状遺構69）、江戸時代中期以降の池状遺構（湿地状遺構11）、耕作溝群、江戸時代後期から明治時代の耕作に伴う用排水路（溝1）、土壙（肥溜）などである。以下に主な遺構の概要を述べる。

表2 遺構概要表

時 代	主な遺構	備 考
平安時代前期	溝70	朱雀大路内溝
平安時代末～鎌倉時代初頭	溝64	朱雀大路西側溝
	湿地状遺構69	埋土の上層に瓦など堆積
江戸時代中期	湿地状遺構11	調査区外東側に広がる池状遺構
	土壙17	湿地状遺構11に連がる池状遺構か
	湿地状遺構19	湿地状遺構11に連がる池状遺構
	溝6・溝40他	耕作溝
江戸時代後期～明治時代	溝1	耕作に伴う用排水路
	土壙2	肥溜
	土壙7	肥溜

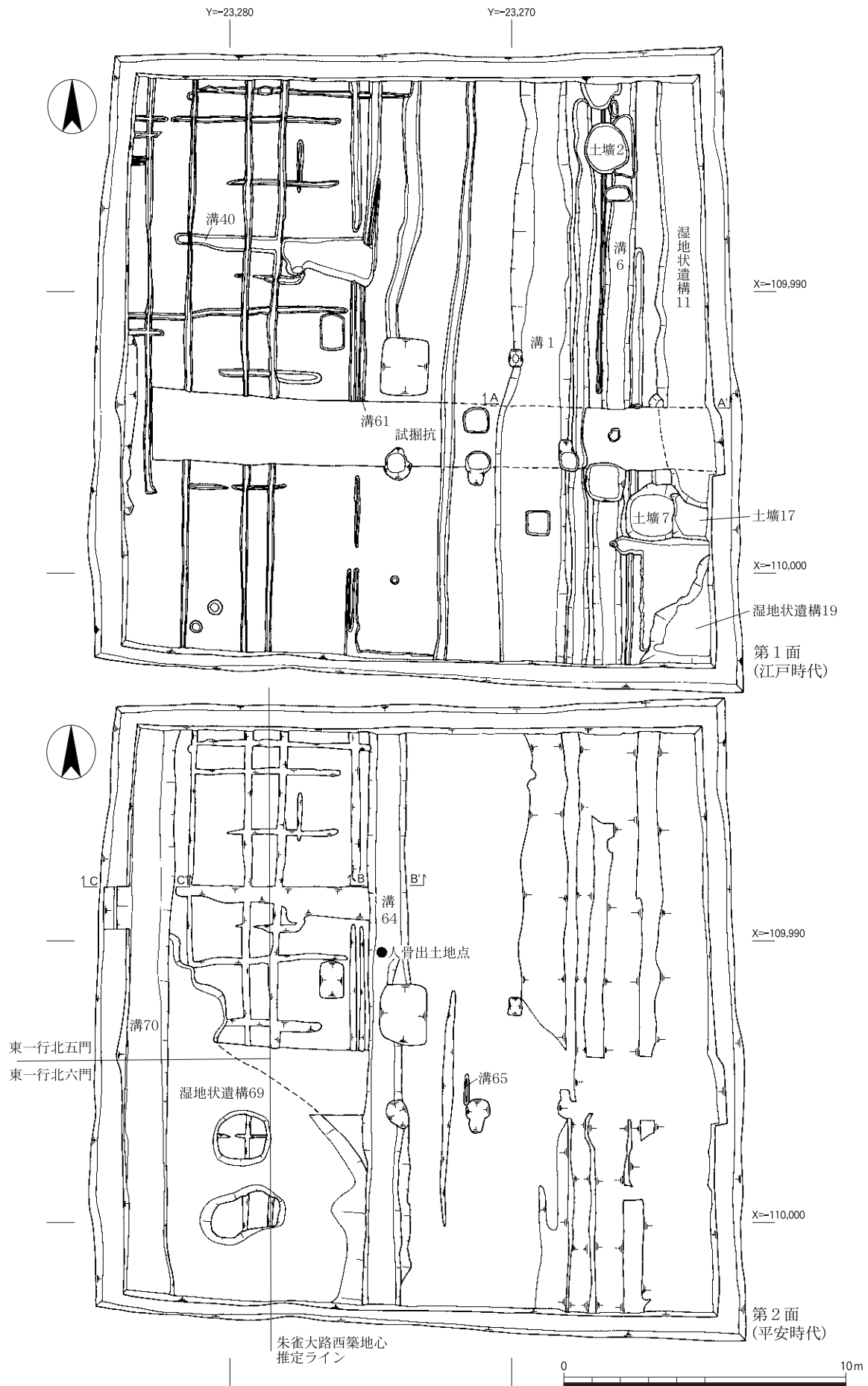
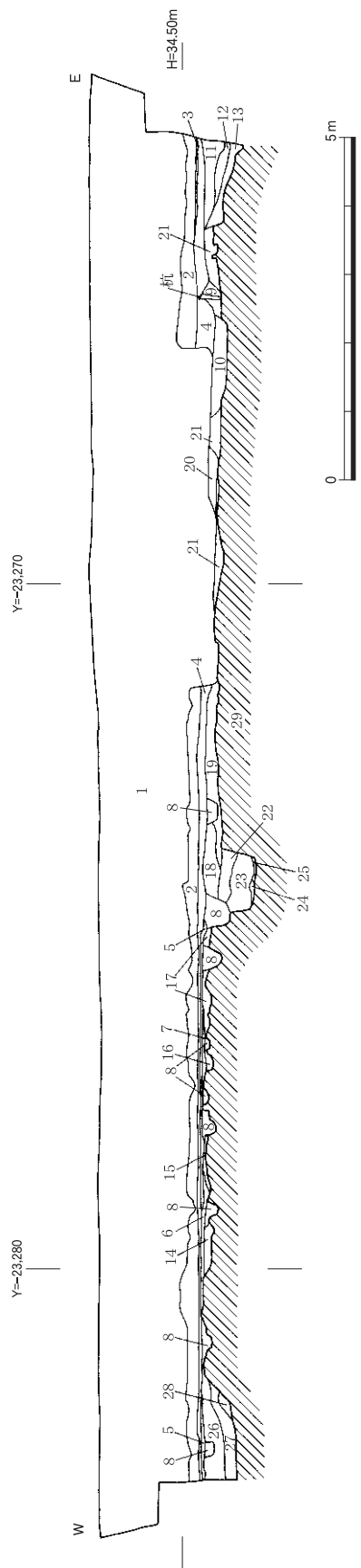
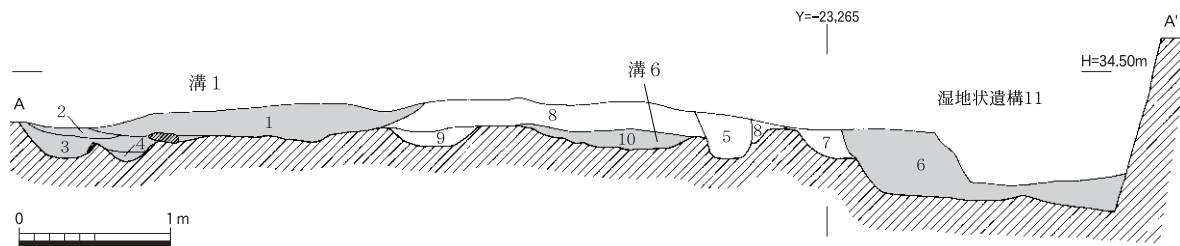


図4 遺構平面図(1:200)



- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 黄褐色砂質土、径1~5cmの礫多く含む (近現代盛土) 2 黒褐色粘質土、径0.5~1cmの小礫混、炭化物多く含む (近世耕土1) 3 黒褐色砂質土、径1~3cmの礫含む (床土) 4 黒褐色粘質土 (近世耕土2) 5 黒褐色粘質土、粘質性あり、径1cmの小礫少量と炭化物含む 6 黒褐色砂質土、炭化物少量含む (溝6) 7 にぶい黄褐色粘質土 8 黒褐色粘質土、炭化物少量含む (近世耕作溝) 9 黒褐色砂質土 (溝6) 10 黒褐色粘質土、粘質性あり、径1~5cmの礫多く含む、炭化物含む (土層22) 11 黒褐色砂質土、炭化物多く含む、陶磁器含む (湿地状遺構11) 12 暗オリーブ褐色砂礫、径0.5~10cmの礫多く含む、瓦含む (湿地状遺構11) 13 黄灰色粘質土混緑灰色粘土、炭化物含む (湿地状遺構11) 14 黒褐色粘質土混青灰色粘土 15 黒褐色粘質土混褐灰色粘質土 | <ul style="list-style-type: none"> 16 黒褐色砂質土、炭化物少量含む 17 黒褐色粘質土、瓦少量含む 18 黒褐色粘質土混黒褐色砂質土、瓦含む 19 灰黄褐色微砂、径1~5cmの礫と瓦含む 20 黒褐色砂礫 (溝1) 21 黒褐色粘質土 22 黒褐色微砂、径1cmの小礫含む、木片含む (溝64) 23 黒褐色砂質土、炭化物多く含む (溝64) 24 黒褐色砂混オリーブ灰色粘土 (溝64) 25 黒褐色砂質土混オリーブ灰色砂質土 (溝64) 26 黒色粘質土、炭化物含む (溝70) 27 黒褐色粘土、炭化物含む (溝70) 28 黒色粘質土混暗青灰色粘土 (溝70) 29 オリーブ灰色微砂 (地山) |
|---|--|

図5 調査区北壁断面図 (1 : 100)



- | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗灰黄色砂、径2～3cmの礫と径5cm以上の大型礫多く含む（溝1） | 7 黒褐色粘質土、径0.5～1cmの小礫少量混（土壌39） |
| 2 黒褐色粘質土（溝1） | 8 褐灰色粘質土、径0.5～1cmと径2～4cmの礫、炭化物少量含む |
| 3 黒褐色微砂、径1cmの小礫少量混（溝1） | 9 黒色粘質土（溝4） |
| 4 黒褐色微砂（溝1） | 10 黒褐色粘質土、径1～3cmの礫少量混、炭含む（溝6） |
| 5 黄灰色粘質土、径0.5cm以下の砂混（柱穴71） | 11 黄灰色粘質土 |
| 6 黒褐色粘質土、径1～4cmの礫少量混、炭・木片含む（湿地状遺構11） | |

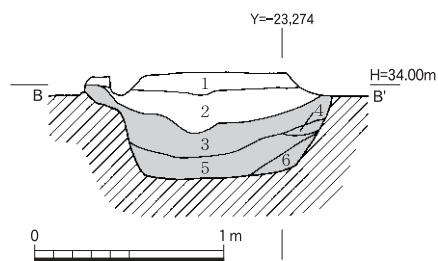
図6 溝1・溝6・湿地状遺構11断面図（1：50）

（2）江戸時代後期から明治時代の遺構

溝1は調査区中央やや東寄りを南北に縦断する溝で、幅約2.3m、深さ約20cmである。埋土は暗灰黄色砂礫で、19世紀中頃の陶磁器類が多く含まれている。この溝は本調査区の南約100mの既調査地点（図1-13-01）でも検出されており、周辺の耕作地のための用・排水路であった可能性が高い。旧国鉄二条駅開設期までのものである。土壌2・7は溝1の東に隣接する位置に設けられた円形の肥溜である。直径は約1.5m・約2.0m、深さはそれぞれ40cmと60cmあり、土壌2には直径約1mの桶の底部が残存していた。土壌7には18世紀末から19世紀初頭の陶磁器類や木製品が多く含まれていた。

（3）江戸時代中期の遺構

湿地状遺構11・19は、調査区の東端部に広範囲に広がる池状遺構の西端部である。本調査に先立って行った試掘調査の際は、Y=-23,265ライン以東約10mは全てこの池状堆積で占められており、大規模な池であった可能性が高い。調査区内では深さ約60cmであったが、試掘坑東端付近では約80cmの深さに達していた。埋土はほぼ黒褐色砂質土で、炭化物や木片、陶磁器類を多く含んでいる。陶磁器組成の主体は18世紀中頃から後半である。土壌17は埋土の違いから湿地状遺構11



- | |
|--------------------------------------|
| 1 黒褐色粘質土（整地の際の客土） |
| 2 灰黄褐色微砂、径1cmの小礫少量混、瓦・土師器含む（整地の際の客土） |
| 3 黒褐色シルト混黒褐色微砂、径1cmの小礫少量混、木片含む（溝64） |
| 4 オリブ褐色砂（溝64） |
| 5 黒褐色シルト（溝64） |
| 6 黒褐色シルト、径1～2cmの礫多量混（溝64） |

図7 溝64断面図（1：40）

とは区別して掘り下げたが、出土遺物に時期差は認められず本来は湿地状遺構11と同じ池の西端部であった可能性が高い。耕作に伴う溝は調査区西半のほぼ全域で検出している。上面の耕作土に伴うもので、幅10～20cm、深さ5～10cm程度のものが主体である。2面ある耕作土の下層が東西方向、上層の耕作土が南北方向の溝に対応していると思われる。遺物は江戸時代中期以降のものを主体に少量出土している。なお、耕作溝40内からは弥生土器の壺、甕類の破片が数個体分、数十点出土している。遺構には伴わないが、壬生遺跡関連の資料として注目される。

(4) 平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構

湿地状遺構69は調査区の南西部を中心に湿地状を呈するもので、規模は調査区外の南西側に広がっており不明であるが、深さは調査区内の南西隅で約30cmある。埋土は黒褐色粘質土が中心で、朱雀大路や二町の宅地内を含め、周辺を広範囲に整地した際に埋められたものと思われる。瓦、土師器、瓦器、輸入磁器など、平安時代末から鎌倉時代初頭の遺物が含まれている。

溝64は調査区の中央部を南北に縦断する溝である。溝断面の形状は逆台形状を呈し、幅1～1.3m、深さ約50cmである。埋土上層には、薄く灰黄褐色の微砂がレンズ状に堆積し、埋土は黒褐色の砂質、もしくはシルトである。遺物は瓦、土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器など12世紀後半代のもので出土した。溝の中心ラインが平安京条坊の推定朱雀大路西側築地心より東約4.5mに位置しており、溝64は12世紀後半代の朱雀大路西側溝と推定される。

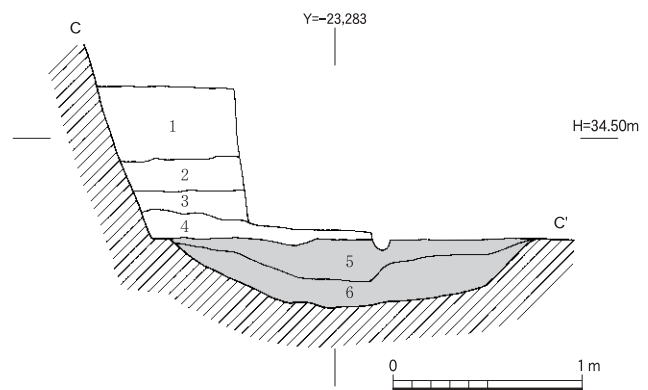
なお、溝64の上層とした灰黄褐色の微砂層には、瓦を中心に土師器が多く含まれていたが、堆積状況から溝本体の遺物ではなく、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて調査区周辺を大規模に整地した際の客土に含まれていたものと推定している。

(5) 平安時代前期の遺構

溝70は、調査区の西端を南北に縦断する南北溝である。当初東肩のみの検出に



図8 溝64上面平面図 (1:40)



- 1 にぶい黄灰色砂質土、径1～10cmの角礫多く含む
- 2 黒色粘質土、炭化物含む
- 3 灰色砂質土、径1cm以下の砂少量混、炭化物含む
- 4 黒褐色粘質土、径1cm以下の砂少量混、瓦少量含む
(湿地状遺構69の埋土または整地客土)
- 5 黒色粘土、径1～2cmの小礫少量混、瓦・土師器含む (溝70)
- 6 褐色粘土、緑灰色砂質土がブロック状に混じる、炭化物少量含む (溝70)

図9 溝70断面図 (1:40)

留まったため、X=-109,992のラインに沿って調査区西壁を拡張し西肩を確認した。溝断面の形状はレンズ状で、幅は約190cm、深さ約40cmである。埋土は上層が黒色粘土、下層が褐灰色粘土の2層である。ただ、溝70の南半は平安時代末期の湿地状遺構69により、5～10cm程度の深さに削平されている。遺物は主に上層から土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦などが少量出土した。溝70の中心ラインが平安京条坊の推定朱雀大路西側築地心より、西約4mに位置することから、右京三条一坊二町に所在した穀倉院に関連する内溝である可能性が高い。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に111箱出土した。その内、木製品が9箱ある。瓦を除く土器、陶磁器類は近世のものが大部分を占める。近世以降の遺物は溝1、土壙7などの19世紀代のもの、湿地状遺構11、土壙17の18世紀後半のものが主体である。陶磁器類の他には、箸・漆器椀・曲物類など木製品が多く出土しているのが特徴である。平安時代末期から鎌倉時代初頭の出土遺物はほとんどが瓦類である。湿地状遺構69の埋土や、溝64上面の整地層からのものが主体である。平安時代の遺物は溝64・溝70がある。溝64は12世紀後半代、溝70は9世紀中頃までの遺物が出土している。その他

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石包丁		弥生土器3点、石器1点		
平安時代前期	瓦、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、銭貨		土師器5点、須恵器5点、銭貨1点		
平安時代末～鎌倉時代	瓦、土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器、焼締陶器、人骨（頭蓋骨）		瓦8点、土師器14点、輸入磁器2点、須恵器1点、瓦器3点、人頭骨1点		
江戸時代中期	棧瓦、土師器、土師質土器、軟質施釉陶器、土製品、肥前磁器、京信楽系陶器、堺・明石播鉢、丹波焼、銅製品、石製品、鼈甲、木製品		磁器17点、陶器16点、土師質土器11点、軟質施釉陶器1点、銅製品1点、石製品1点、鼈甲1点、木製品16点		
江戸時代後期～明治時代	棧瓦、土師器、土師質土器、土製品、肥前磁器、瀬戸美濃磁器、京信楽系陶器、源内焼、丹波焼、中国磁器、ヨーロッパ陶器、銭貨、銅製品、石製品、木製品		磁器18点、陶器14点、土師質土器7点、土製品1点、ヨーロッパ陶器1点、銭貨1点、銅製品1点、石製品1点、木製品7点		
合計		121箱	159点（9箱）	24箱	88箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理作業後、遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。
内訳：土器・陶磁器・瓦など110箱、木製品11箱

の遺物としては、弥生土器と石製品（石包丁）がある。いずれも後世の遺構からの出土品で遊離資料ではあるが、弥生時代から古墳時代の遺跡として周知されている壬生遺跡関連の遺物が、本調査地でも確認されたことは注目される。以下に主要な遺物について概要を述べる。

（２）江戸時代後期から明治時代の遺物

江戸時代末から明治時代初頭にかけての遺物には、溝1、土壙7出土のものなどがある。

図10は溝1出土のものである。1～4は肥前系磁器で、1は小型の粗製染付椀で、崩れた梅樹文のいわゆる「くらわんか椀」である。2・3は亀甲繫に鶴文の蓋と湯呑椀である。内面文様は雷文と四方禳・松竹梅文である。薄手で比較的上質の製品である。4は梅花と笹文の染付小瓶で、仏飯具である。5・6は瀬戸美濃系の染付磁器で、端反椀である。7～9は京信楽系の陶器で、7は鎧椀、8は鉄釉鍋、9は鉄絵の急須の蓋である。10は土師質土器の花塩壺の蓋である。型作りで、「深草/砂川/権兵衛」銘の隅丸長方形の印が表面に押されている。11は土製品のいわゆる泥面子で、小児の玩具である。歪みが強く、型抜きの際の指の痕が裏面に残る。円圏内に「春日」の文字がみられる。12は銭貨の寛永通寶で、いわゆる新寛永銭である。遺物組成の中心はやや幅があるが19世紀中頃である。

図11・12は土壙7出土遺物である。土壙7は、耕作に伴う肥溜と考えられる遺構であるが、廃絶期にごみ穴として利用されたらしく、大量の陶磁器とともに木製品などが含まれていた。図11の13～24は肥前系染付である。13は矢羽根・斜格子文の小丸椀で、見込には手描五弁花文がある。

14は素書で雲竜と火炎宝珠を描く、「ハ」の字状高台の椀である。15は青磁染付の椀で、口径13.1cmの大型品である。高台内には崩れた角福、見込は巴状の草花文である。16は体部がやや内傾する筒形椀で、菊花に氷裂文、高台内には崩れた角福、見込は手描五弁花と四方禳文である。17は草花文の広東椀で高台内には異体字、見込は花鳥文である。18・19は蓋で、18は草花に八橋文様でやや酸化焼成気味である。19は内外面とも蕪文の「ハ」の字状高台の椀に伴うものである。20～22は皿類で、20の高台内は重焼きのため釉剥ぎされている。21は粗製の輪花皿である。草花文で、

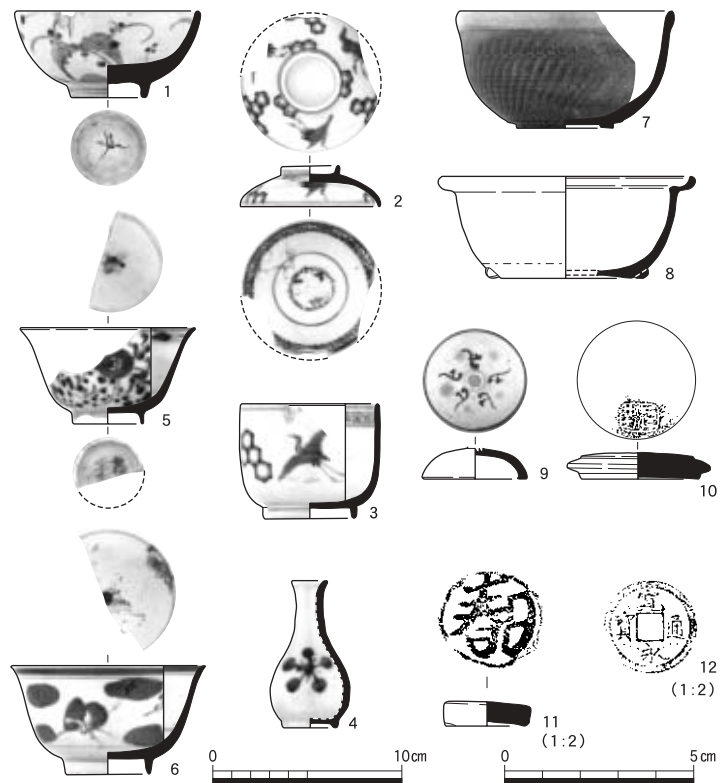


図10 溝1出土遺物実測図（1：4、11・12は1：2）

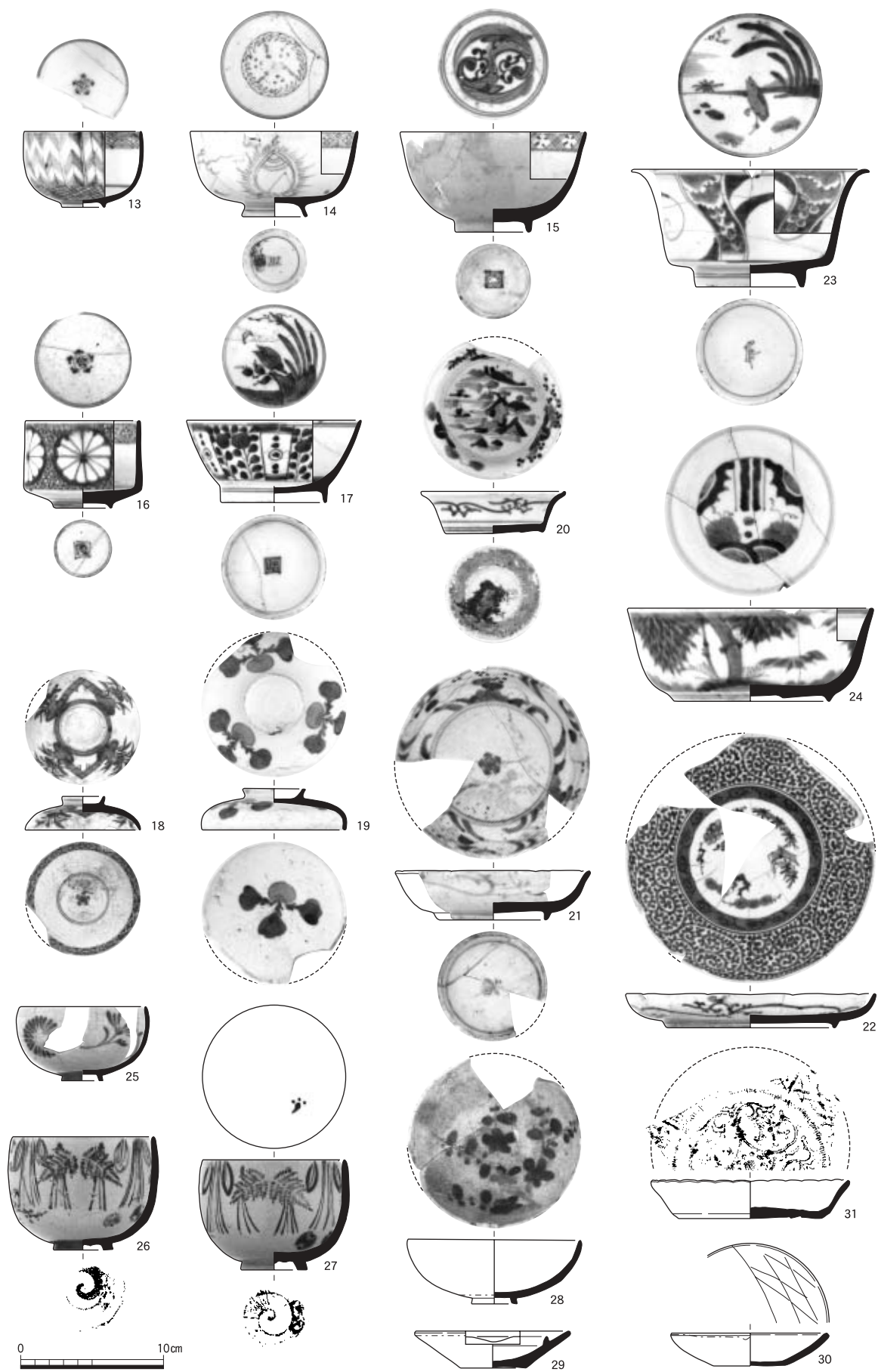


图11 土坑7出土器物实测图1 (1:4)

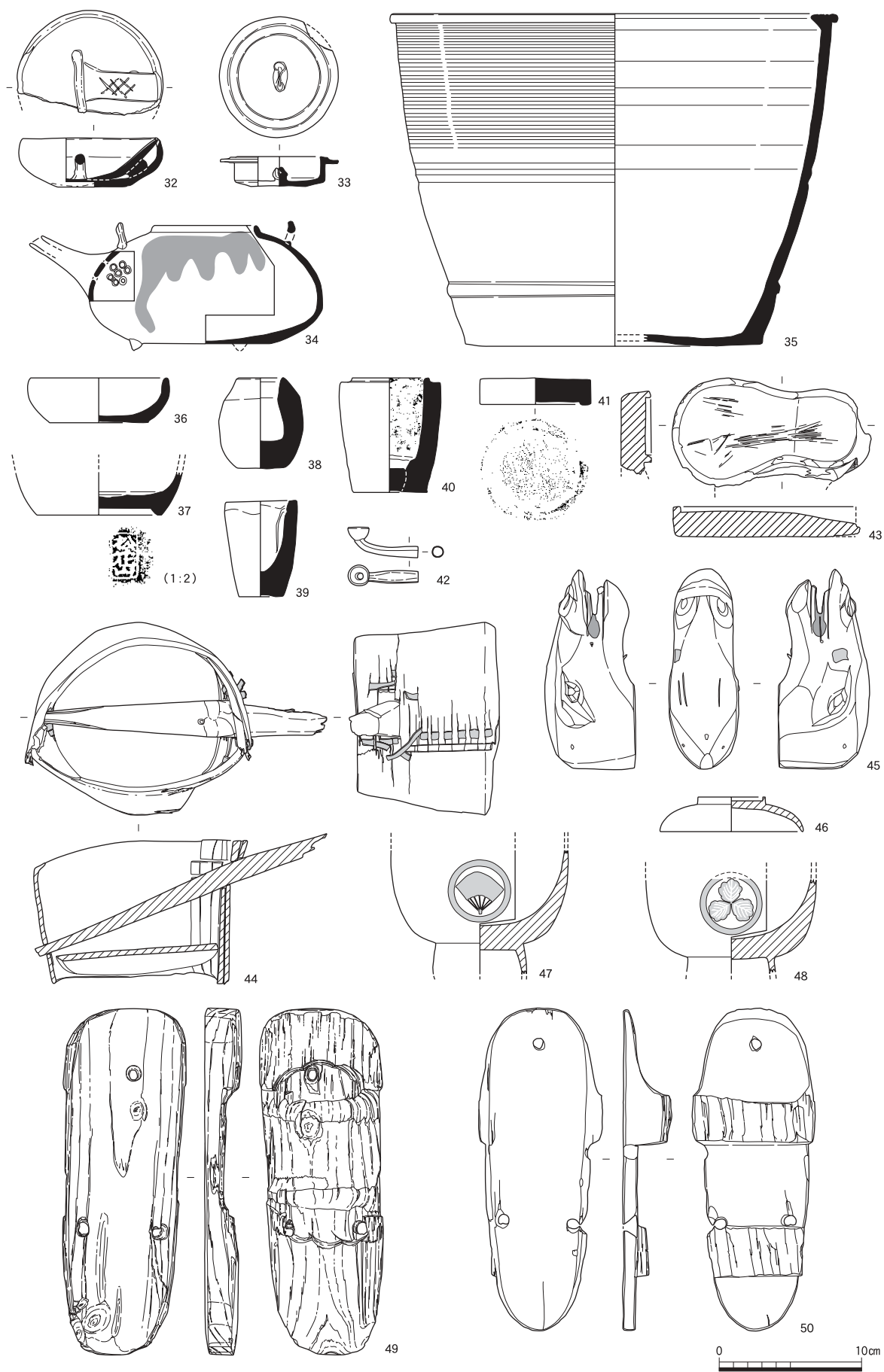


图12 土壙7出土遗物实测图2 (1:4)

見込にコンニャク印五弁花、外面は如意頭文繫で、高台内には渦福銘がある。22は口径17.5cm、器高2.5cmのやや大型の輪花皿で、蛸唐草に松竹梅繫、外面は如意頭文である。高台内にハリ支えのピン痕が3箇所残る。23・24は鉢類で、23は口径16.6cmで、内外面とも捻花葡萄文、見込は花鳥文の鉢。24は口径17.2cmで蛇ノ目凹形高台の器壁が厚い鉢である。これらの肥前系磁器は、18世紀後半から19世紀初頭のものである。25～35は陶器類である。25は金と緑彩で菊花文を描く京焼の上絵椀である。26は錆絵染付の松に、上絵の竹・梅と注連縄文のある椀。27は注連縄文と松竹梅の上絵椀で、見込にできた小さなキズを隠すために「丁字」を書き込んでいる。いずれも、釉下に白化粧土を施している。大振りでガッシリとした高台内は、渦状に削り出している。高台内右側に京都粟田口の「錦光山」銘が押されている。上絵は黒く変色しているところもあるが、金・赤・緑・青彩が残っている。注連縄文の椀は、徳島県下で出土例が多く研究が進んでいる。それによると今回出土したものはB群 b類 ①に近似しており、¹⁾18世紀半ば以降のものである。28～30は京信楽系のもので、28は見込に雑な梅花文が緑・赤・薄青彩で描かれている。29と30は灰釉の灯明皿受と灯明皿である。31は源内焼で、²⁾凸型成形により見込に唐草文、周縁部に籠目や亀甲文を施す輪花皿である。内外面緑釉で、豊付に重焼の痕跡がみられる。口縁部は輪花状で、蛇ノ目凹形高台である。胎土も釉調ともいわゆる軟質施釉陶器に近い。

図12の32は灰釉の灯明皿で、17世紀代の瀬戸美濃系陶器である。33は鉄釉の土瓶蓋で信楽焼。34は白化粧に緑釉流の京焼の土瓶である。35は内面に鉄泥を塗り、外面は灰釉を掛ける甕で、丹波焼である。36～41は土師質土器で、36はロクロ成形で白色胎土の鉢で、いわゆる「でんぼ」といわれるものである。37は体部外面に白色と赤色の絞胎にした薄い粘土板を貼り付け、ミガキを施した火入底部である。底部に長方形枠「松花山」銘が押される。深草産のものである。38～41は焼塩壺で、38は岩倉木野産、39は深草産、40・41は堺産湊系の蓋と身である。42は真鍮製の煙管の雁首で、その形体から18世紀後半のものである。³⁾43は瓢箪型に作る石製の硯で、本来は右方にもう一面、小型の朱墨用の硯が付属していた痕跡が残る。44～50は木製品である。44は大型の柄杓で、曲物と柄の接合部分は桜皮を用いて固定されている。45は馬の頭部を象ったもので、彩色されていたらしく目の周囲などの窪みの部分には、白い胡粉が残っている。頭頂部後側に耳とたてがみを取り付けたと推定できる小穴がある。轡の位置には焼火箸状の工具を用いて丸く抉り出す。頸と身体との接合部分は平滑に作られており、どの様に接合されていたのか想像できない。また、具体的な用途も特定できない。46～48は漆器椀の蓋と身で、それぞれ外面は黒、内面は赤に塗り分けられている。47の椀には丸に扇、48の椀には丸に三つ柏の家紋が3箇所に描かれている。49・50は下駄で、49は板目取りの台で、厚目の小判形の材から前後歯の間の中央部を円鑿などで抉り出し、前壺と横緒孔を開ける。50は柁目取りの台で、瓜形を呈する。台裏は平坦で、歯は接地面が左右にやや広がる。どちらも漆などが塗られた痕跡は見あたらない。遺物組成の中心は18世紀末から19世紀初頭頃のものである。

(3) 江戸時代中期の遺物

江戸時代中期の遺物は、湿地状遺構11、土壙17などのものがある。

図13は湿地状遺構11出土遺物である。51～61は肥前系磁器で、51は白磁の紅皿、52は松の木の文様をコンニャク印判で押す小椀、53は赤絵の線描で網目文の椀、54・55は雨降文の粗製の椀と仏飯器である。56は高台内に二重角枠に「筒江」の銘がある椀、57は梅樹に菊花の粗製椀である。58～60は皿で、58はコンニャク文を内外面に施す皿、59・60は見込蛇ノ目釉剥の皿である。61は失透した青磁釉が厚く掛かる鉢で、内面の線刻は厚い釉のため文様は不明である。62～70は京信楽系陶器で、62・63は上絵の丸椀。64は茶と白色の化粧土を流し、上に透明釉を掛けた天目形の椀である。65は錆絵染付の筒形椀。66は上絵の注連縄文の平椀である。67・68は白化粧錆絵の半筒椀である。69と70は灰釉の蓋と灯明受皿である。71は信楽焼の壺で、内外面の体部上面に鉄釉をながし掛ける。72は肥前系の陶胎染付の火入で、白化粧土の上に染付で横線を描く。73～75は土師器で、口径4.9～5.4cmの小型皿である。76は白色胎土でロクロ成形の小型鉢で、いわゆる「でんぼ」と呼ばれるものである。77は「泉州麻生」銘の焼塩壺である。78は外型成形のほうらくで、外面に煤が付着している。79～90は木製品で、79～82は箸。83・84は刷毛の柄である。85は黒地に細かい梨地の上に草花を描く蒔絵の櫛である。86は柄鏡の箱で、内外面に薄く透明感のある柿色の漆が塗られている。側縁の板を留める竹製の釘が残る。側縁の厚みを除く内法は16cmで、直径5寸幅の鏡容器とすると外箱の可能性が高い。87は小型の柄杓で、幅3.5cm、厚み1.5～2.0cmのへぎ板を桜皮状のもので繋ぎ、底板は2箇所鉄釘で留める。柄との接合部分は失われている。88は厚さ約5mmで、長さ約11.6cmが残存する木札状のもので、墨書痕跡もなく用途は不明である。89・90は直径約26cm、厚さはそれぞれ、約8mm・約10mmの円板状木製品である。89は上面の中心から半径9.9cmの内区画があり、区画の外側に向けて深さ約3mmのV字溝を巡らす。内区画のほぼ中心には、3本の木釘が裏面に貫通して残存している。内区画は表面にヤリガンナ状の工具で平滑にした痕跡が残り、黒く塗られている。側面と裏面は木肌のままである。90は上面に半径約11.1cmの内区画があり、89と同じく外側に向かって深さ約5cmのV字溝を巡らす。溝内には厚さ約3mm、幅約1.6cmのリング状の曲物を取り付け、膠状のもので接着されている。上面および側面には、透明感のある黒褐色の漆が塗られている。裏面中心部には口径約1.1cm、深さ約7mmの穴が穿たれている。89・90は本来、丸櫃のような一つの製品を構成する部材と推定できるが、具体的な用途は不明である。91は鼈甲製品で、一方を薄い円板にもう一方を串状に削り出した髪飾である。表面に漆で加飾した痕跡が残るが、文様などは不明である。92は銅製の簪で、中央から二股の足部にかけて刺突文で梅花状の文様を施す。陶磁器組成の中心は18世紀後半代である。

図14は土壙17の出土遺物である。93～98は肥前系磁器で、93は白磁の紅皿である。94は輪高台の蓋物の身で、口縁端部内側は釉剥されている。95は高台置付を除いて全面施釉される粗製の染付椀である。96は脚部下半と高台内無釉の仏飯器である。97は梅樹と塀の文様と高台内に崩れた「大明年製」銘のある蓋である。98は梅樹文で、口縁端部に鉄釉を塗るいわゆる口紅皿である。

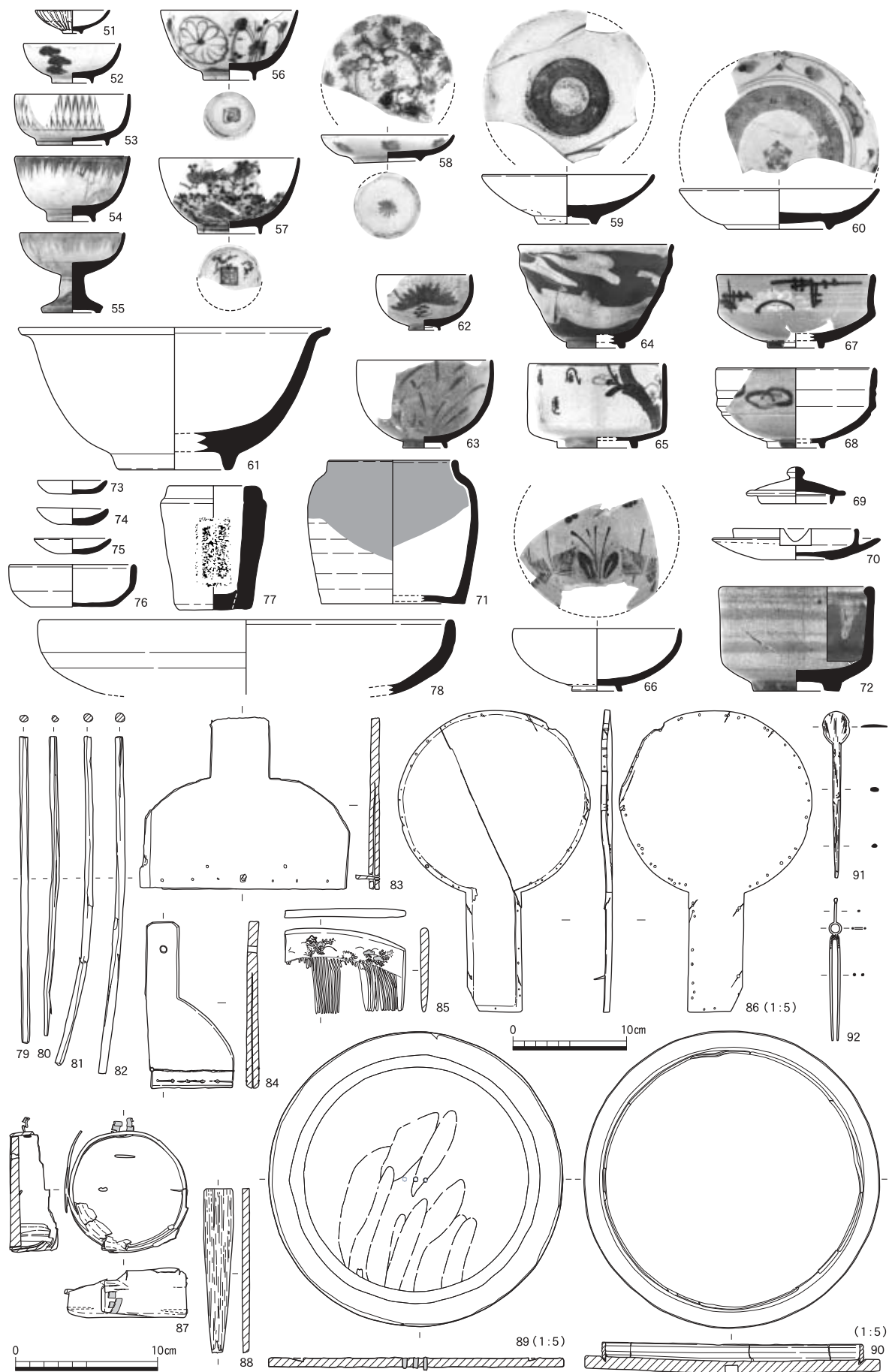


图13 湿地状遺構11出土遺物実測図（1：4、86・89・90は1：5）

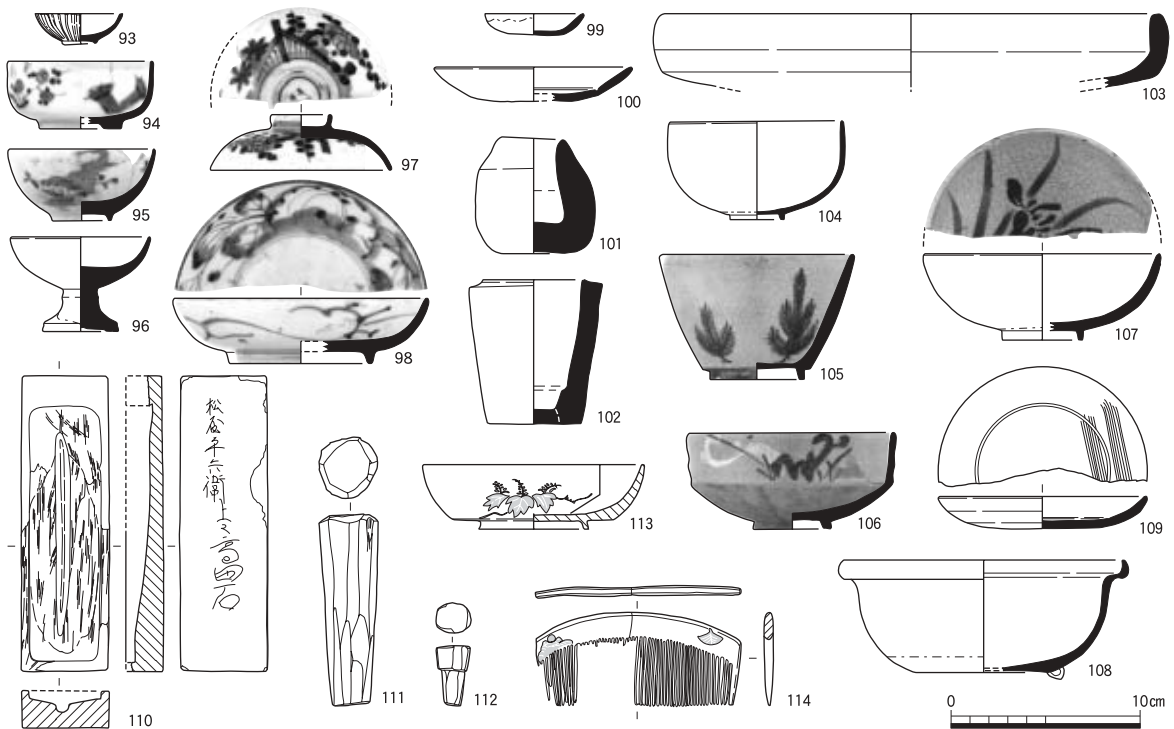


図14 土壙17出土遺物実測図（1：4）

99・100は土師器皿で、100は内面に圀線の巡る大型皿である。101～103は土師質土器で、101は京都産、102は堺系の焼塩壺である。103はほうらくの口縁部で、外面には煤が付着する。104～108は京信楽系の陶器で、105は錆絵の小杉椀、106は白化粧錆絵の半筒椀、107は上絵の平椀である。108は鉄釉の鍋である。109はロクロ成形のいわゆる柿釉の軟質施釉陶器である。110は石製硯で、裏面に「松屋平兵衛上々高田石」と読める線刻文字がある。111～114は木製品で、111・112は木栓である。113は内外面は赤、口縁端部と高台の畳付は黒の浅い漆器椀で、体部外面2箇所黒で蕨文を描く。114は櫛で、黒の地に銀杏の葉と月に薄が描かれている。

（4）平安時代末から鎌倉時代初頭の遺物

図15は湿地状遺構69や溝64上面などの埋土から出土した軒瓦類である。115・117溝64上面、118・122は湿地状遺構69の埋土、その他は包含層からの出土である。115は西寺系と考えられる複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。蓮華文の外側に圀線、珠文、圀線を持つ。間弁は蓮弁と同形である。瓦当部裏面の上半には粘土が剥がれた痕跡が残り、本体部が接合されていた部分と考えられる。116は複弁蓮華文で、中房には1 + 6個の蓮子を持つ。瓦当部裏面はナデ調整を行う。117は蓮弁が盛り上がった複弁蓮華文軒丸瓦である。調整は磨滅が著しく不明瞭である。大極殿、朝堂院、豊楽殿、広隆寺などに同文瓦が出土している⁴⁾。118は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房に蓮子を1 + 8個、外区に16個の珠文と唐草文を施す。瓦当部裏面に指頭圧痕と本体部を取り付けたときに反時計回りに撫でた痕跡が認められる。端部や本体外面はケズリ調整を施す。内区の範キズと外区に残る範の木目から、栗栖野瓦窯出土の瓦と同範の可能性が高い⁵⁾。

119は唐草文を配する軒平瓦である。顎部裏面をケズリのちナデ、顎部凸面をケズリ調整する。

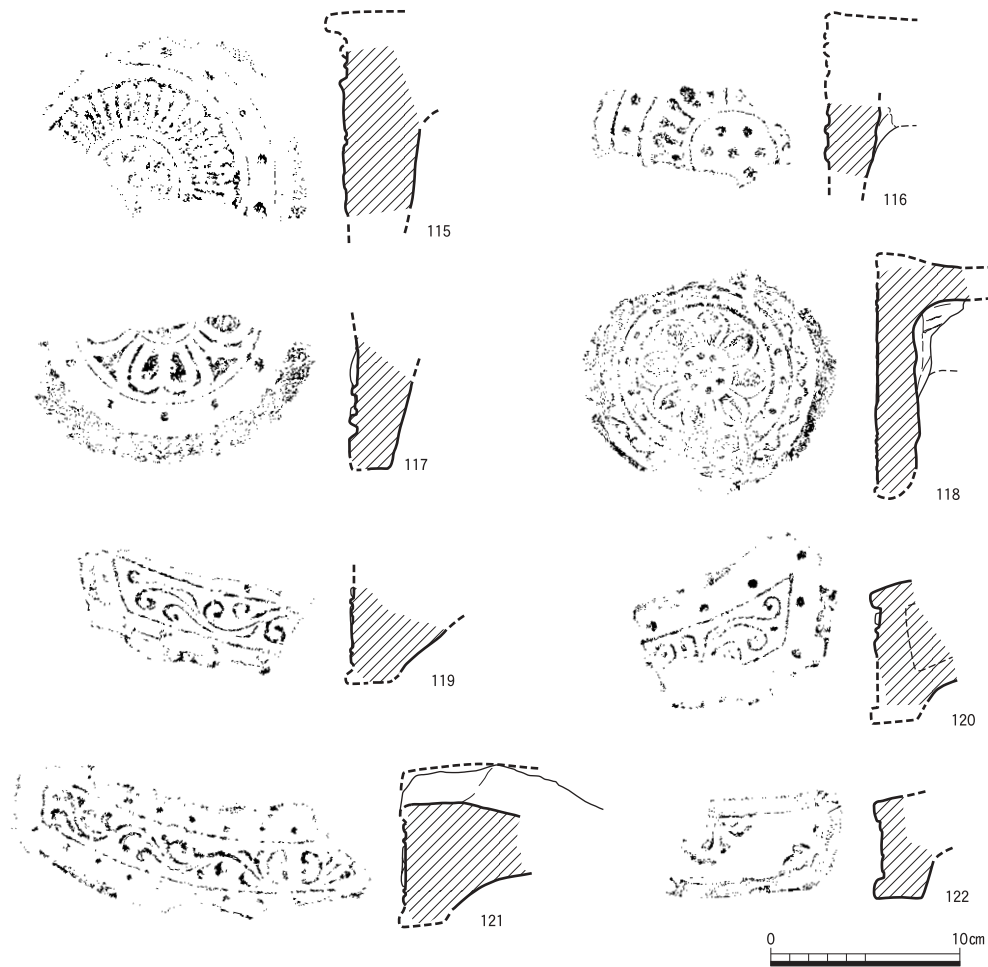


図15 出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

西賀茂角社瓦窯跡出土瓦に類似したものがある。⁶⁾ 120も119同様、唐草文軒平瓦である。119と比べると唐草の巻き込み部分の線の幅が細い。全面を丁寧にケズリ調整を行う。顎部裏面の破損部分に本体部接合時の粘土が残る。朝堂院から同文様の瓦が出土している。⁷⁾ 121は唐草文軒平瓦である。中心に対向C字文を配置し、外側に向かって唐草が三転する。唐草は線幅が太く、その先は丸くなっている。上面瓦当面側は横方向のナデを施し、本体部では布目圧痕が残る。顎部裏面はケズリで、顎部凸面は細かい擦痕が縦横に認められる。右のC字文が左のものより小さいこと、外側の唐草の頭が潰れていること、圈線の数箇所に見られることなどから、小野瓦窯出土瓦と同範と考えられる。⁸⁾ 122は半截宝相華文を上下に交互配置する播磨産の軒平瓦である。上面と顎部裏面を丁寧にナデ、顎部凸面をケズリ調整する。時期は115～117・119・120が平安時代前期、118・121が平安時代中期、122が平安時代後期と比定できる。

図16は溝64の出土遺物である。溝64からは土師器皿を中心に、瓦器椀・皿類、須恵器鉢、輸入磁器類が少量出土している。123・124は平坦な底部に口縁部が短く屈曲して立ち上がる受皿である。土師器皿には口径により2種類に分けられる。125～130は口径が9.2～9.7cmで小型の皿、132～136は口径14.4～15.0cmで大型の皿である。131は口径9.1cm、ロクロ成形で糸切底の白色土器皿である。137～139は瓦器椀と皿である。137は椀の口縁部小片で、外面は粗いヘラミガキ、

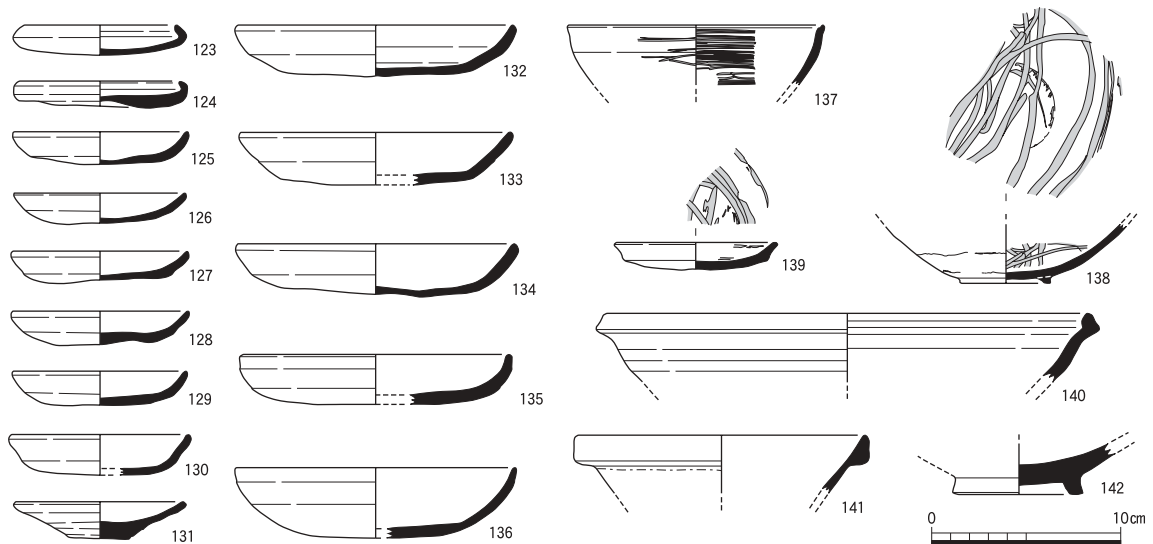


図16 溝64出土遺物実測図（1：4）

内面は横方向のヘラミガキで、口縁端部内面に沈線が巡る。138は外面はオサエとナデ、内面は幅広の粗いミガキの椀底部。139は体部外面はナデ、内面は幅広の粗いミガキの皿の小片である。140は須恵器鉢の口縁部小片で、播磨系のものである。141・142は輸入白磁椀である。141は肥厚した玉縁の口縁部で、やや黄味を帯びた白磁椀。142は逆台形の高台をもつ大型の椀底部で、高台内面は無釉である。12世紀後半から末頃の遺物である。



図17 溝64頭蓋骨出土状況（東から）

図17の頭蓋骨は頭頂を西、右側頭部を下にして、溝底面にほぼ水平な状態で溝64の底面直上から出土した。左側頭部は発掘時に破損したが、損壊部分の破片はほぼ取り上げることが出来たので、ある程度の復元は可能と考えられる。下顎骨や椎骨、その他の部位は見つかっていない。上顎骨には4本の歯が残り、前から門歯、犬歯、第2小白歯、第1大白歯と確認された。第1小白歯が抜け落ちた時期は、生前か骨化した後かは不明である。頭蓋最大長18.5cm、頭蓋最大幅15.2cm、頭頂部にある平坦面の長さが10.0cm、残存高が13.2cmである。歯が永久歯であり、縫合痕が癒着し、耳骨も出来上がっていることなどから、成人と考えられる。

（5）平安時代前期の遺物

平安時代前期の遺物は、溝70などから土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが少量出土している。いずれも小片が多く、図示できるものは少ない。

図18は溝70出土遺物である。143～147は土師器類で、143・144は外面に粗いヘラケズリをもつ皿で、口径は16.2cm・16.8cmである。145・146は外面の調整はヘラケズリで、いずれも焼成が

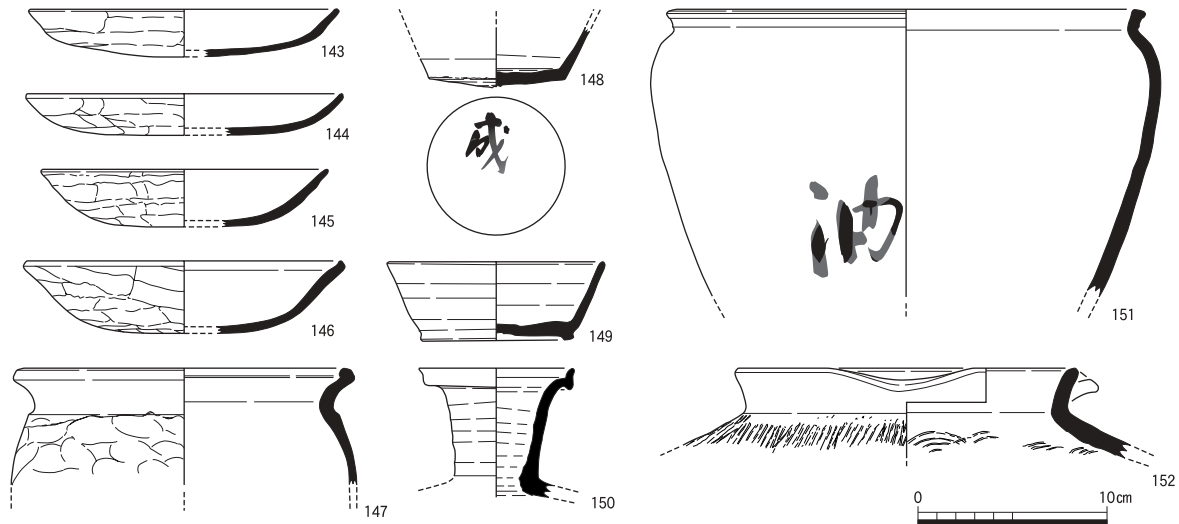


図18 溝70出土遺物実測図（1：4）

甘い。146は口縁部がやや外反する。147は甕口縁部で、口縁端部内側を丸く収める。外面は煤が付着する。復元口径は18cmである。148～152は須恵器類である。148の杯Aの底部には「成」、151の鉢の体部には「油」の墨書がある。152の甕は口縁部のみの破片であるが、大きく焼き歪みが残る。9世紀中頃までの遺物である。

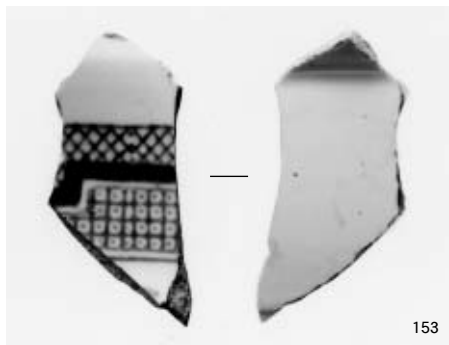


図19 ヨーロッパ陶器皿

（6）その他の出土遺物

図19～21は、その他の遺物である。

図19の153はヨーロッパ製の銅版転写皿の小片である。破片が小さいため文様パターンの特定が困難だが、類品の出土資料などからウィロウ・パターンと呼ばれる文様の中間ボーダーの一部と推定される。近年日本各地で出土例が報告されており、京都市内でも2例の報告例がある¹⁰⁾。重機掘削中の耕作土内より出土した。

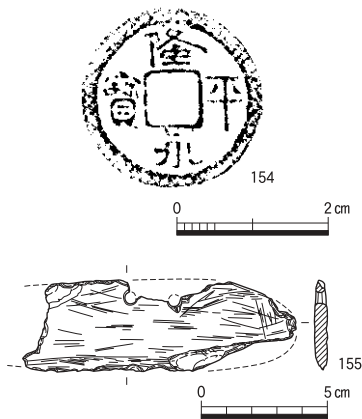


図20 溝64出土銭貨拓影（1：1）・石器実測図（1：3）

図20の154は「隆平永寶」で、延暦十五年（796）に発行された皇朝十二銭の一つである。法量は口径26.45mm、厚さ1.50mm、重さ2.50gである。155は石包丁である。粘板岩製で、両面と背の一部に研磨痕が確認できる。裏面の大半は自然面が残る。刃部は両面に作られている。2方向から穿孔された2つの孔の一つには、孔の中心に向かって斜め方向からの窪みと擦痕があり、表面の荒れ具合から使用痕と考えられる。転用途中の再加工品と考えられ、刃部・背部・欠損部に押圧剥離が残る。残存最大幅10.3cm、重さは30.0gである。154・155はいずれも溝64の埋土中

より出土した。

図21の156～158は弥生土器で、近世の耕作に伴う溝から出土した。156は溝61、157・158は溝40からのものである。156は近江系の受口状口縁甕である。口縁部外面に刷毛状工具を用いて刻みを入れ、胴部には櫛描直線文と波状文を施す。内面はヨコナデとケズリ調整を行う。口縁部外面の一部に煤が付着し、内面には焦げ痕が残る。復元口径は14.6cmである。157は復元口径16.7cm、胴部最大径18.6cmの近江系受口状口縁鉢で、口縁部外面に連続しない波状文が描かれ、胴部には3本の櫛描沈線と刺突列点文が施文される。外面全体に付着した煤のため、調整は不明瞭である。内面はヨコナデ調整で

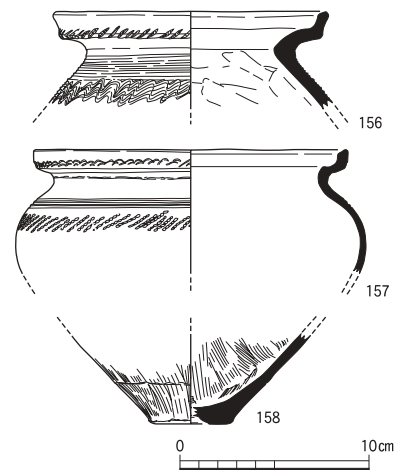


図21 弥生土器実測図（1：4）

ある。158は底径4.5cmの内外面ともに刷毛目調整を施した底部片である。底面はナデ調整で、底面中心部の未貫通孔は後に充填した粘土塊が外れたものと考えられる。156と157が弥生時代後期後葉であり、158も同時期と考えられる。

註

- 1) 北條ゆうこ氏の分類による。注連縄文茶碗に関しては、北條ゆうこ「徳島出土のしめなわ文茶碗」『近世信楽焼をめぐって』 関西陶磁史研究会 2001年、北條ゆうこ「しめなわ文茶碗再考」『論集 徳島の考古学』 徳島考古学論集刊行会 2002年、などの論考がある。
- 2) 出土品とほぼ同種の伝世品がある（『平賀源内のまなざし 源内焼』（財）五島美術館 2003年）。また、江戸遺跡でも類品が出土している（『千駄ヶ谷五丁目遺跡』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997年）。
- 3) 古泉 弘『江戸の考古学』考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社 1987年
- 4) 『平安京古瓦図録』 平安博物館編 1977年
- 5) 『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告 第4輯（財）古代学協会 1978年
- 7) 註4に同じ。
- 8) 吉崎 伸「平安京の「小野瓦屋」について—小野瓦窯の発掘調査から—」『最新の発掘調査成果、研究成果』 第10回近畿ブロック埋文研究会 全国埋蔵文化財法人連絡協議会・近畿ブロック会議 2004年
- 9) 現場で切り取り作業を行い、現在はクリーニングの後、反転保存している。なお、頭蓋最大幅は残存した半分の計測値を倍数したものである。
- 11) この皿はヨーロッパの中国趣味にに応じて作られたもので、イギリスやオランダで広く製造されている。出土資料は小片のためどちらの国で製作されたものか不明だが、日本にもたらされた年代は1820～1840年代頃とされている。京都市内出土例として下記の報告がある。
『平安京左京六条三坊七町 京都市下京区小田原町・東鋸屋町』京都市文化博物館調査研究報告 第11集 京都文化博物館 1995年
『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度 京都市文化市民局 1999年

5. ま と め

今回の調査対象地は平安京右京三条一坊二町の穀倉院東端部と朱雀大路西側溝および路面の一部である。右京三条一坊の一・二・七・八町は穀倉院に該当し、これまでの穀倉院に関連する調査では、平成9年度に主要施設とみられる大型の建物2棟をはじめ、多くの遺構を検出している。また南接する三町右京職の調査では、大型建物を初め「右籍所」「計帳所」など右京職を裏付ける墨書土器が出土しており、朱雀大路の西側溝も約90mにわたって検出している。

今回の調査では、平安時代の遺構として朱雀大路の西側溝と、穀倉院に関連する二町の東側内溝を検出した。また二町の敷地内と西側溝の上面には、平安時代末期から鎌倉時代初頭と推定される大規模な整地層も確認した。調査範囲が穀倉院の東縁辺部に当たるため詳細はよくわからないが、内溝が9世紀中頃までの遺物で占められ、以後広範囲に湿地状遺構により削平されている状況や、湿地状遺構を埋めた整地層が12世紀後半から13世紀初頭の遺物が主体となることから、穀倉院の存続期間が短く以後、平安時代末頃までの機能を停止していた可能性を示すものである。一方、朱雀大路西側溝の埋没年代は、出土した土器などから平安時代末頃と推定されるが、前述の三町の調査でも同様の結果が得られており、この頃までは朱雀大路も機能していたと思われる。しかし、側溝に水流があったと考えられる時期に、短期間とはいえ人頭骨が放置され、溝埋土中に埋没した状況からは、周辺地域が広範囲にわたって荒廃していたことが窺える。このことは、直後に大規模に整地されていることから推定できよう。

また今回の調査では、朱雀大路の築地痕跡や路面などは検出しておらず、江戸時代中期以降の湿地状遺構11や近世の耕作により削平されたものと推定された。ただ、朱雀大路の路面上で検出した大規模な江戸時代中期の湿地状遺構は、周辺の調査でも知られておらず大量に出土した陶磁器や木製品とともに、周辺地域の土地利用を考える上で興味深い成果である。なお、この他に平安時代以前の遺物として弥生時代の土器・石器などが出土した。遺構外の遊離資料ではあるが、壬生遺跡の存在を裏付ける貴重な資料といえよう。

6. 付章 溝64の土壌分析について

頭蓋骨を検出した溝64の堆積物をもちいて、環境復元のための分析を行った。分析内容は、花粉分析・種実同定・珪藻分析であり、環境考古研究会に委託した。分析試料は、溝64第2層〔灰黄褐色微砂層（径1cmの小礫少量混、瓦・土師器含む）、以下上層と記述〕と、第3・5層〔層幅が狭く分離できなかつた、3層＝黒褐色シルト混黒褐色微砂層（径1cmの小礫少量混、木片含む）、5層＝黒褐色シルト層（径1～2cmの礫多量混）、以下下層と記述〕の2試料である。試料採取地点は、人骨出土地点から北へ約220mであり、最下層（5層）が人骨出土層に対応する。

分析の結果、溝の下層は水生植物や流水性種の珪藻・水草が生育し、水が流れていたのに対し、上層では止水性の沼沢湿地付着性指標種が多く、水草が繁茂し、水が淀んでいたということが判明した。また、上層は下層より寄生虫卵密度が高かつたものの低率であり、ウリ類（種子）、イネ（炭化果実）、ソバ属（花粉）の検出から若干の投棄があつたとされるが、清水性の珪藻が多く含まれていることから、汚染は低かつたという結果を得た。

この分析結果をふまえると、溝64の上層は湿地状の土壌であつたことになる。しかし、上層は整地による客土と解釈していることから、ほぼ同時期に整地された湿地状遺構69の影響を受けて水分を多く含む土質に変化したと考えられる。清水性の珪藻が多く含まれることについては、湿地状遺構69や客土に含まれていた可能性があり、珪藻が生育できる環境であつたと限定することはできない。溝64は朱雀大路西側溝に該当するが、平安京造営当時に造られた溝ではなく、12世紀後半に再度掘り直された溝であり、溝の肩部分がほとんど崩れていないことや堆積状況、溝上部の整地層に含まれていた土師器皿や瓦片から、下層の流水期間は非常に短かつたと考えられる。

この分析結果に人骨の出土状況を合わせると、人骨は水が流れていた時期（下層）に何らかの要因によって溝内に落ちて骨化し、短期間で堆積土により埋没したと考えられる。

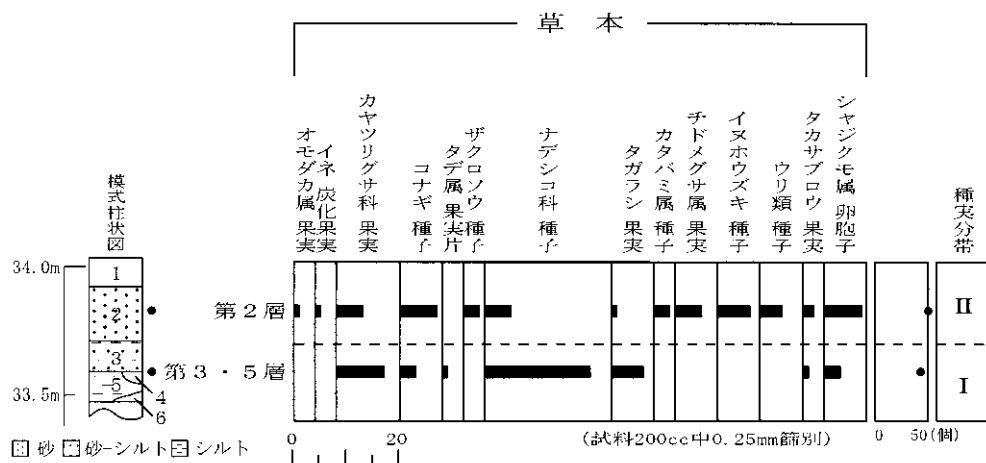


図22 溝64における種実ダイアグラム

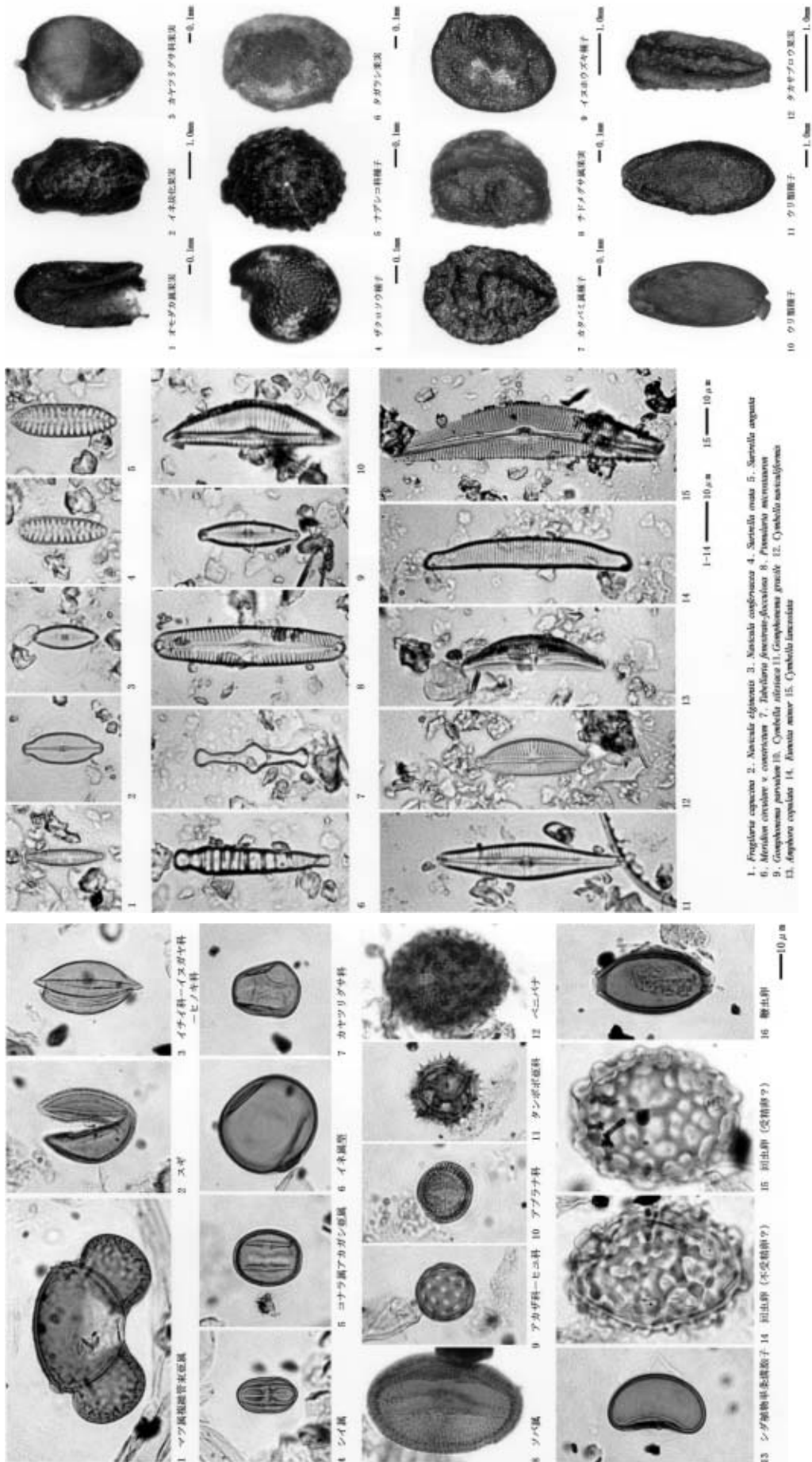


図25 溝64の花粉・胞子・寄生虫卵 (左)、珪藻 (中央)、種実 (右)

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうにちょうあと							
書名	平安京右京三条一坊二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-6							
編著者名	能芝 勉・近藤奈央							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年10月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょういちぼう 三条一坊 にちょうあと 二町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうとがのおちょう 西ノ京梅尾町	26100		35度 00分 29秒	135度 44分 42秒	2004年7月 12日～2004 年9月3日	約467m ²	ビル新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 三条一坊 二町跡	都城	弥生時代		弥生土器、石包丁		壬生遺跡関連資料		
		平安時代	溝、湿地状遺構	土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入磁器、瓦		朱雀大路西側溝の確認		
		江戸時代	溝、土壙、湿地状遺構	土師器、染付磁器、施釉陶器、木製品、瓦類、焼締陶器				
		江戸時代～近代	耕作溝、土壙、流路	土師質土器、染付磁器、施釉陶器、焼締陶器、木製品、瓦類				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6

平安京右京三条一坊二町跡

発行日 2004年10月29日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961